

1. 限界突破キャンプ事業の推進

(1) 趣 旨

教育再生実行会議の第十次提言において、我が国の子供たちの自己肯定感の低い状況の改善が重要であると、国全体で取り組むべき事項とされている。自己肯定感をバランスよく育むためには、自然体験活動などの様々な体験活動を通じて、達成感や成功体験等を得るとともに、失敗や挫折を経験したときに、自分を受け入れ、課題に立ち向かう姿勢を身に付けることが重要である。

そこで、国立赤城青少年交流の家では、上毛三山のうちの二山である赤城山（地蔵岳・長七郎山・鈴ヶ岳・鍋割山・黒檜山・駒ヶ岳・荒山高原）と榛名山（掃部ヶ岳・榛名富士）の自然を舞台に、7泊8日の遠征型キャンプで、登山・自炊などの活動を、仲間と共に、最後までやり抜くことを通して、何事にも自信を持って取り組める力を育むことをねらいとした。この力を育むためには、子供たちに負荷をかけ、仲間と共に「挑戦・協力・発見」という体験を積み重ねることが大切であると考えた。

この事業をより推進するためには、職員だけで企画するのではなく、県内外の様々な機関と連携し、実施することが必要であり、今年度も「推進委員会」を設置し、企画の段階で外部から3名の委員の先生方にご意見を頂き、事業運営に反映させることができた。

(2) 実施概要

●期 日

【事前キャンプ】令和元年7月13日（土）～14日（日）（1泊2日）

【本キャンプ】令和元年8月3日（土）～10日（土）（7泊8日）

●参加者

【対象】小学5年生～中学2年生 23名（男子17名、女子6名）

【内訳】小学5年生：6名 群馬県：18名
小学6年生：10名 栃木県：2名
中学1年生：3名 東京都：2名
中学2年生：4名 千葉県：1名

●班編成

- ・1班5～6名で4班に編成（異年齢集団）
- ・各班にボランティアスタッフ1名ずつ配置

●スタッフ

- ・国立赤城青少年交流の家職員：4名
- ・ボランティアスタッフ：6名（班付き4名、管理2名）
- ・群馬県立妙義青少年自然の家職員：1名（事前キャンプ）

(3) 推進委員会の概要

①委員の構成（推進委員4名）（五十音順）

委員長：国立赤城青少年交流の家 所長	松村 純子
國學院大學人間開発学部 准教授	青木康太郎
群馬県立妙義青少年自然の家 社会教育主事	青山 裕也
群馬大学教育学部 准教授	岩瀧 大樹

②委員会の日程と議事内容

○第1回推進委員会 5月21日（火）

（推進委員の役割）

- ・岩瀧委員には、広報やボランティアの意欲向上の助言。青山委員には次年度の企画運営や群馬県立妙義青少年自然の家との連携。青木委員には自己肯定感向上に関する調査を依頼。

（実施案検討）

- ・今年は登山を中心にしたキャンプで、ステージごとにねらいをもとに取り組み、それが達成できたかふりかえる場を設ける。また、そこでは翌日の目標をしっかりと持たせる。
- ・猛暑や台風など場合の代替プログラムをしっかりと考えていくことが必要。

（調査検討）

- ・自己肯定感を上げるには、人との関わりが大事。小学校高学年と中学生では声かけが違うので、カウンセラーにその部分をしっかりと指導することが大事。
- ・キャンプの成果をどう家庭や学校で生かしたかも知りたいので、一ヶ月後のアンケートも、しっかりと取ってほしい。

○第2回推進委員会 10月30日（水）

（事業報告）

- ・全員無事に最後までやり遂げることができた。また、群馬テレビにもその様子が3回に分けて放送された。

（アンケートの分析）

- ・参加者のアンケートでは自分のがんばりを褒められた体験が多いほど、自尊感情ややり抜く力の数値が高くなるという結果が出た。
- ・ボランティアの良かった点としては子供の背中を後押しするような声をかけることができた事と挙げていた。課題点として、野外炊事やテント設営など細かな指示ができなかったと挙げていた。しかし、課題点もスタッフ同士で協力して解決するなど、キャンプを通してボランティア自身もコミュニケーションの大切さを学んでいた。

（報告書の構成案）

- ・最初は弱音ばかり吐いていた子が、仲間やスタッフの励ましにより、最後は前向きに声をかけながら登山を続けられた。こういう個人の変容も報告書に載せられると良い。

○第3回推進委員会 2月18日（火）

（事業のまとめ・報告書の確認・来年度の日程案）

- ・全国の青少年施設へ報告書を送り、普及を図るとともに、その報告書の成果や課題をふまえて、来年度の実施案を作成していくと良い。